令和４年　９ 月 ７ 日

令和４年度「とちぎっ子学習状況調査」の結果概要について

宇都宮市立富屋小学校

家庭や地域から「信頼される学校」であるためには，学校の状況や児童の実態を保護者や地域の方々に十分御理解いただく必要があり，その上で，家庭や地域と一体となって児童を育てることが大切であると考えています。

こうした考えから，令和４年度「とちぎっ子学習状況調査」における本校児童の学力や学習状況の概要について，以下のとおり公表します。

また，調査結果は，学習指導の工夫・改善に役立てることが大切ですので，調査結果の分析，指導の改善策などを併せて掲載します。

【調査の概要】

1　目的

本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し，児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに，各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより，本県児童生徒の学力向上に資する。

2　調査期日

令和4年4月19日（火）

3　調査対象

小学校　第４学年，第５学年（国語，算数，理科，質問紙）

中学校　第２学年　　（国語，社会，数学，理科，英語，質問紙）

4　本校の実施状況

第４学年	国語	２３人	算数	２３人	理科	２３人
第５学年	国語	３２人	算数	３２人	理科	３２人

5　留意事項

(1)　本調査は，対象となる学年，実施教科が限られていることや，必ずしも学習指導要領全体を網羅するものでないことなどから，本調査の結果については，児童が身に付けるべき学力の特定の一部分であることに留意することが必要となる。

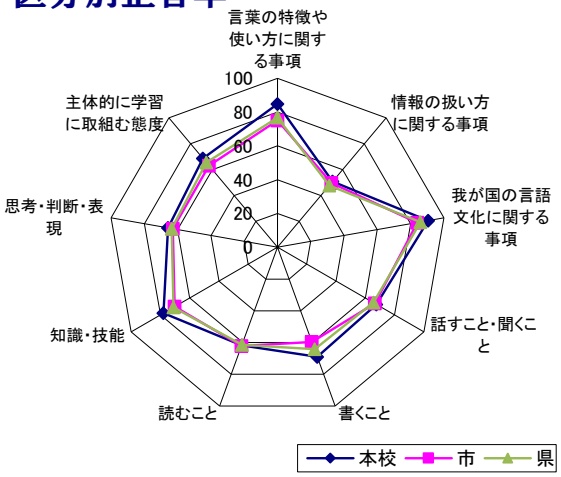
(2)　本校の傾向等を分かりやすく示すために分類・区分別の平均正答率などを公表した。

(3)　平均正答率の数値は調査結果のすべてを表すものではないため，「本年度の状況」，「今後の指導の重点」などの分析を併せて記載した。

宇都宮市立富屋小学校 第４学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県，市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	言葉の特徴や使い方に関する事項	84.8	75.1	76.7
	情報の扱い方に関する事項	50.8	49.6	47.8
	我が国の言語文化に関する事項	90.5	84.0	85.9
	話すこと･聞くこと	67.6	66.5	65.5
	書くこと	69.0	59.6	64.2
	読むこと	61.9	62.2	61.5
観点	知識･技能	77.9	70.2	71.1
	思考･判断･表現	65.7	62.9	63.6
	主体的に学習に取組む態度	68.6	63.0	65.5



★指導の工夫と改善

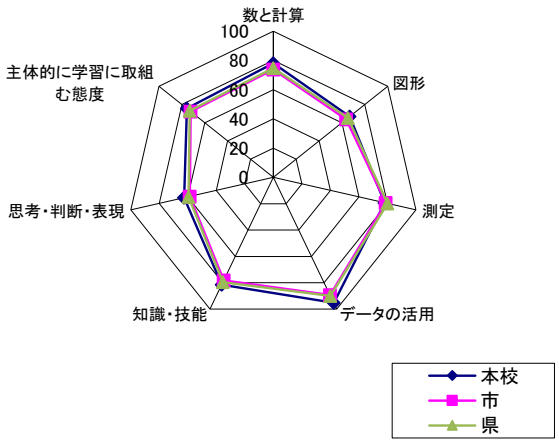
○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や使い方に関する事項	○本校の平均正答率は、市の平均より大きく上回っている。 ○漢字を読む問題は、全員が正答していた。 ●漢字を書く問題では、読む問題に比べると、正答率が低い。	･漢字の学習については。朝の学習や家庭学習などで繰り返し書く練習をする他、AIドリルなどを活用して漢字の書きの定着を図る。
情報の扱い方に関する事項	●情報の扱い方に関する設問では、全体では市や県の平均をやや上回っているが、情報と情報との関係について理解し、話し手が伝えたいことの中心を捉える問題の正答率が36.9%と低い。文字数の指定がある空欄に適切な言葉を書きこむ問題に正確に解答することができない様子がうかがえる。	･文章の中の考えとそれを支える事由や事例、全体と中心などの情報と情報との関係を理解できるように、段落相互の関係に注意したり、キーワードに着目するなど、学習の仕方について助言していく。
我が国の言語文化に関する事項	○正答率が90.5%で、市の平均より6.5ポイント高く、よく理解できている児童が多い。 ●漢字辞典の使い方の正答率が5割と、他の設問に比べて低い。	･国語辞典に比べ、漢字辞典を使う頻度が少なかったので、教室に漢字辞典を置き、定期的に使う機会を設ける。
話すこと・聞くこと	○全設問で県や市の正答率と同等もしくはやや上回っている。授業ではペア･小グループ活動を日常的に行ったり、ゲストティーチャーを招いてインタビューやメモを取ったりなどしてきた成果が出てきたと思われる。 ●話し合いの内容を聞いて、自分の考えを理由を挙げて話すように書く設問で、やや正答率が低くなっている。「書くこと」が苦手な児童が多いことに関連していると思われる。	･聞いた内容を、相手意識をもって伝える学習を、授業で繰り返し行っていく。
書くこと	○本校の平均正答率は、市の平均より大きく上回っている。文章を書くときの基本的な知識を押さえて指導を行い、文章の間違いを正したり、よりよい表現に直してきた成果が表れてきていると思われる。 ●無回答の児童が2割ほどいる。 ●指定された長さで文章を書くことと、段落の役割を理解し2段落構成で書くことに課題が見られる。	･無回答率を減らすために、書くことに抵抗感をもつ児童には、文章の型を設定して書かせるなどして苦手意識を解消する支援を継続して行う。また、部分点がもらえる場合もあるので、「短い文章でもいいので、自分の考えを文字に変換し、まずは書く」という意識をもたせるようにする。
読むこと	○本校の平均正答率は、市の平均とほぼ同じである。 ●物語文、説明文ともに、文章の内容を捉えることは概ねできているが、段落や場面ごとに内容を捉えることに課題がある。	･授業では、段落ごとに場面を分ける学習を十分行ってきたと思っていたが、初めて読む文章での場面分けに課題があることが分かった。今後は、朝の学習等を利用して初めて読む文章を場面分けをしたり、段落ごとにおおよその内容を捉える学習を取り入れるようにしたい。

宇都宮市立富屋小学校 第４学年【算数】分類・区分別正答率

★本年度の県，市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と計算	78.1	73.8	74.8
	図形	66.7	63.7	65.3
	測定	78.1	78.9	80.1
	データの活用	95.2	89.3	90.0
観点	知識・技能	81.5	78.3	79.5
	思考・判断・表現	62.6	58.6	59.5
	主体的に学習に取組む態度	75.6	72.3	73.1



★指導の工夫と改善

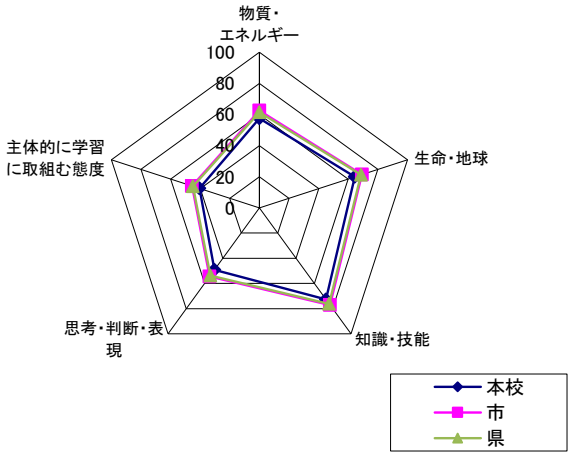
○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	○平均正答率は、県と市の平均をやや上回っている。 ○授業や宿題等で、できなかった計算問題を何度も解き直すことで、計算の力がついてきたと思われる。 ●数の相対的な大きさについての理解と、数直線上に示された分数を読み取る問題の正答率が低	・単元テストを行った際にはよくできていたので、学習してある程度の時間を経た後に再度解く機会を意図的に設定し、その際、前の学年までに学んだ内容についても復習できるように配慮したい。
図形	○本校の平均正答率は市の平均をやや上回っている。 ○二等辺三角形の作図では、本校の児童は、ほぼ全員が正答することができていた。 ●同じ大きさのボールが入っている箱の横の長さから、ボールの半径を求める問題が、本校の平均正答率が市の平均より低い。	・円の直径や半径等を計算で求める問題の類題や、日常生活の具体的な場面を設定した問題を解く機会を増やす。
測定	○本校の平均正答率は、市の平均とほぼ同じである。 ○はかりの目盛りの読み方や、容器を用いた計測の仕方の理解に良好な状況が見られる。 ●重さの単位が正しく使われているものを選ぶ問題の正答率が比較的低い。	・目盛りを読むこと、道のりと距離の違いなど、基本的な事項の理解はできている児童が多いため、「100gは、○○と同じくらいの重さだ」といった、量感を掴む指導を日常の中で取り入れる。
データの活用	○本校の平均正答率は市の平均より、上回っている。 ○表と棒グラフでは、平均正答率が95%程度とよく理解できていた。	・実生活においても、データを活用してまとめる機会を設けていく。

宇都宮市立富屋小学校 第４学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県，市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	物質・エネルギー	57.5	62.5	61.5
	生命・地球	64.4	69.2	68.6
観点	知識・技能	72.7	77.2	76.3
	思考・判断・表現	49.2	54.4	53.7
	主体的に学習に取組む態度	40.5	45.5	44.9



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の改善
物質・エネルギー	○「音の性質」の、音の大きさと糸の震え方の関連について問う設問では、県の正答率を7ポイント以上上回っている。 ○「電気の通り道」の、電気を通すもの通さないものを問う設問では、県の正答率を14ポイント以上上回っている。 ○「物の重さ」の、形を変化させたものの重さについて問う設問では、県の正答率を上回っている。 ○正答率が高い設問については、授業の実験で扱った学習内容が多く、体験的な学びを通して知識の定着を図った成果と考えられる。 ●「光の性質」の単元では、すべての設問で県の正答率を下回った。特に、鏡で「反射した光を重ねたときの温度の変化を推測する問題については県の正答率を18ポイント下回った。 ●「磁石の性質」の単元では、すべての設問で県の正答率を大きく下回った。特に、鉄が磁石になるときの極の向きについての設問では約9ポイント、磁石に成り得る素材について、記述式で解答する設問では約15ポイント下回っている。 ●正答率が低い設問の多くは、学習した知識を活用して推測したり、根拠を示したりするものであり、考えを整理し思考することに課題があると考えられる。	・実験の目的をしっかりと理解し、根拠をもって予想を立て、結果から分かることについて考えをまとめる一連の授業の流れを通して、体験的に学習できる場を多く設定し、児童の興味・関心を高めながら学習に取り組める授業を引き続き実施していく。 ・実験の予想や結果の考察などにおいて、まず自分の考えをもつことを意識させていく。また、児童同士が活発に意見の交流ができるような場を設定し、自分の考えと比較したり変容させたりしていきながら、学習内容の理解を深めていく。 ・学習した知識を活用して、推測したり根拠を示したりできるようにするため、条件を変更して考えたり、既習内容と比較したりする活動を意図的に取り入れていき、学習内容を整理して考えを深められるようにしていく。（光と音の性質の違い、磁石の力と電気の通る条件の違い等）
生命・地球	○「自然の観察」の、観察記録カードの共通点や差異点を見出す設問では、県の正答率を約9ポイント以上上回っている。 ○「植物の育ち方」の、植物（ホウセンカ、ヒマワリ）の体のつくりについての設問では約5ポイント、ホウセンカの育ち方についての設問では約13ポイント程度、県の正答率を上回っている。 ○モンシロチョウの幼虫についての設問では、県の正答率を約9ポイン以上上回り、100％の正答率であった。 ○正答率が高い設問については、観察を通して実践的に学習した成果と考えられる。 ●「自然の観察」の、虫眼鏡の使い方の設問では、県の正答率を約17ポイント下回った。 ●「太陽と地面の様子」の、地面の温度の変わり方についての設問では、県の正答率を20ポイント下回った。 ●正答率が低い設問の多くは、選択肢中の類似した誤答を選んでしまうことが多く、知識の定着の曖昧さが課題と考えられる。	・生き物を定期的に観察する活動を通して、実践的に学んでいく場を引き続き多く設定する。また、身近な生活場面にある事柄と、授業で取り上げている事柄を関連付けて考えさせ、理解を深められるように指導していく。 ・生き物の観察結果など、変化の過程をより分かりやすくするように、グラフや表などの資料にまとめる活動を取り入れていき、正しく資料を読み取れるように指導していく。 ・知識の定着が曖昧な点が見られることから、重要語句や基礎的な内容について重点的に復習をしていき、問題を解く活動を増やしていきながら定着を図っていく。 ・授業において、自分の考えに理由付けしたり、資料を用いて分かりやすく説明したりする活動を取り入れていき、学習内容を表現する力の向上を図っていく。

宇都宮市立富屋小学校 第４学年 児童質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

○授業の内容がよく分かるかどうか、学習が好きかどうかの質問では、全教科において「はい」と回答した児童の割合は、いずれも市町村や県平均を上回っている。今後も分かる授業、達成感を得られる授業を目指し、教材研究を行っていく。そして、「朝学」や「パワーアップタイム」、授業における少人数指導などを継続し、個に応じた指導を徹底することで、学力向上を目指していく。

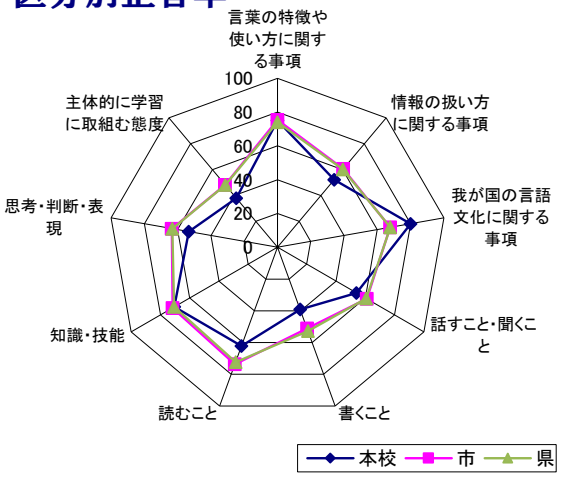
○「クラスは発言しやすいふん囲気である」「授業では、自分の考えを発表する機会が与えられている」「クラスの友達との間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である」の項目で、市や県の平均を上回っている。ペアや小グループでの話し合い活動や人前で話す機会などを効果的に取り入れた授業をコーディネートしている成果が見られる。

●「授業の最後に、学習したことを振り返る活動をよく行っている」、「まとめをしているか」の回答が市と県の平均を下回っている。これまで以上に児童に分かりやすく振り返りの提示をしたりノートに書いたりして、徹底して振り返りやまとめの時間をとるよう努める。

宇都宮市立富屋小学校 第５学年【国語】分類・区分別正答率

★本年度の県、市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	言葉の特徴や使い方に関する事項	75.0	75.4	74.1
	情報の扱い方に関する事項	52.2	60.5	60.2
	我が国の言語文化に関する事項	80.0	67.7	67.8
	話すこと・聞くこと	54.0	61.0	60.7
	書くこと	39.2	51.2	52.8
	読むこと	62.2	73.7	72.4
観点	知識・技能	70.5	71.7	70.6
	思考・判断・表現	53.3	63.5	63.2
	主体的に学習に取組む態度	38.0	48.2	48.1



★指導の工夫と改善

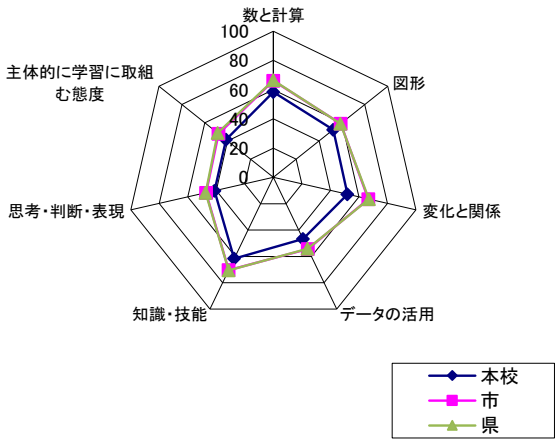
○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
言葉の特徴や使い方に関する事項	平均正答率は、県の平均とほぼ同じである。 ○漢字を書く設問では、県の平均とほぼ同じ、もしくは上回っていた。 ●漢字を読む設問では、県の平均を下回っている設問があった。	・漢字スキルで新出漢字を学習する際に丁寧にチェックし、誤って漢字を覚えることがないようにする。また、朝の学習や家庭学習においても繰り返し練習する機会を作る。 ・各単元の学習の中で、新出漢字を確認し、必要に応じて小テスト等を行っていき定着を図る。
情報の扱い方に関する事項	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ●漢字辞典の使い方で、総画索引と部首索引の調べ方を問う設問では、県の平均を大きく下回っている。 ●情報と情報との関係について理解し、理由や事例などを挙げながら話す文章について考える設問では、県の平均を大きく下回っている。また、回答類型を見ると無回答の割合が3割近くに及んでいる。	・日頃の授業の中で、漢字辞典を使う学習活動を設定し、実際に使いながら漢字辞典の使い方に慣れさせる。 ・国語科だけでなく他教科の授業においても、提示された資料から必要な情報を選ぶ練習を行っていく。また、情報を選ぶだけでなく、その情報を見て自分はどう考えるかなど、情報をもとにして文章を書く練習も意識的に取り入れていく。
我が国の言語文化に関する事項	平均正答率は、県の平均を上回っている。 ○ことわざの意味を知り、正しく使えているかを問う設問では、県の平均を12.2ポイント上回っていた。今までの授業や日常生活を通して、さまざまな言語に触れ、それを使う技能が身に付いてきていることが推察される。	・ことわざ、慣用句、故事成語については、教科書で出てきたときにその意味やどのようなときに使うのか紹介し、正しい使い方を理解できるようにする。 ・語彙数を増やし、日常生活で使うことができる言葉を増やしていくために、図書室へ行き本に慣れ親しむ機会を作る。
話すこと・聞くこと	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ●話し手が伝えたいことの中心を捉える設問や、司会の役割を果たしながら話し合い、意見の相違点に着目して、考えをまとめる設問では、県の平均を下回っている。相手が話していることの要点を捉えたり、相手の意見を聞き、自分の意見との相違点について考えたりすることに課題が見られる。	・日頃の授業の中で話したり聞いたりするときのポイントを伝え、話したり聞いたりする際の視点を理解できるようにする。 ・自分の意見を話したり、その意見を聞いたりする学習活動の場面を各教科において設定し、筋道を立てて話す能力や相手の意図をつかみながら聞く能力を育てる。
書くこと	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ●指定された長さや2段落構成で文章を書く設問で、県の平均を大きく下回っている。条件が設定されている文章を書くことに課題がみられる。 ●内容の中心を明確にし、事実と自分の考えを書く設問では、県の平均を下回っている。無回答や回答類型にない回答をしている児童の割合が、県の平均に比べ高い。	・長い文章を書くことに抵抗がある児童がいるので、授業内外において文章を書く機会を多く設定していく。その際にいきなり書き始めるのではなく、文書を書く際のポイントを示してから活動に取り組ませることで、文章を書くことに慣れることができるようにする。 ・国語科の授業を中心に、条件が設定された文章を書く時間を設けることで、文章を書く技能の向上を図る。
読むこと	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ○説明文の叙述を基に、相互段落の関係を捉える設問では、県の平均をやや上回っている。 ●物語の内容を読み取る3つの設問では、すべての設問で県の平均を下回っている。登場人物の気持ちを叙述を基に捉えたり、性格を具体的に想像したりすることに課題がみられる。	・物語文の学習では、登場人物の言動だけでなく、場面の様子や移り変わりなどの叙述にも着目させて読み進めることができるようにする。 ・説明文の学習では、大きなまとまりの中で大切な言葉や文章を見つける学習を通して、文章の内容を理解させるとともに、段落ごとの関係に着目させ、文章の構成について気付かせる。

宇都宮市立富屋小学校 第５学年【算数】分類・区分別正答率

★本年度の県，市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	数と計算	58.4	66.1	66.4
	図形	52.4	58.9	58.8
	変化と関係	52.0	66.6	67.0
	データの活用	46.7	54.4	54.2
観点	知識・技能	61.7	70.4	70.6
	思考・判断・表現	41.3	47.2	47.5
	主体的に学習に取組む態度	41.4	47.8	48.8



★指導の工夫と改善

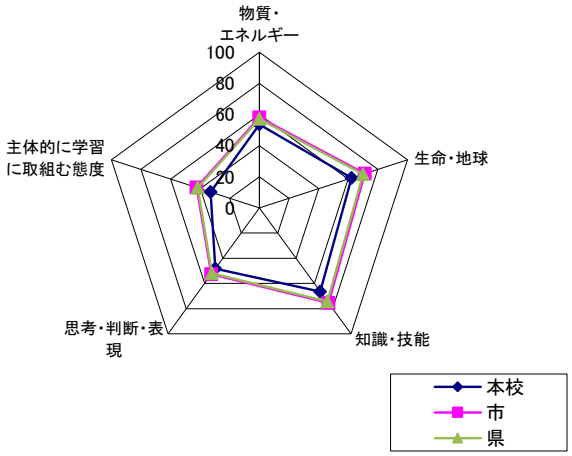
○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の重点
数と計算	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ○四則や括弧の混じった式の計算順序に関する設問では、県の平均を上回っている。 ●小数や分数、簡単な場合についての割合に関する殆どの設問において、県の平均を下回っている。基本的な計算や2つの数量の関係について理解することに課題が見られる。	・新しい単元に入る際には、既習の知識を確認して身に付いていないポイントを把握する中で、児童の実態に合った授業を展開することができるようにする。 ・朝の学習や家庭学習などでプリントやAIドリルを用いて反復学習を行う中で、基礎的、基本的な知識・技能を定着することができるようにする。
図形	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ○角の大きさの目盛りの読み取りや角の大きさを求める設問では、県の平均とほぼ同じである。 ●面積の単位に関する2つの設問では、どちらも県の平均を約8～10ポイント下回っている。面積の単位について、実感的に理解できていなかったり、複合図形の面積の求め方が分からない児童が多くいることが推察される。	・面積や体積の単位について取り扱う際には、教科書で学習内容について触れるだけではなく、デジタル教材を活用したりその広さや大きさを実際に作ってみたりするなどして、視覚的に理解できるようにする。 ・図形の面積の求め方について考える問題を取り扱う際には、既習の長方形や平行四辺形などの面積の求め方に帰着して考えさせる。
変化と関係	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ●簡単な場合についての割合の設問では、県の平均を大きく下回っている。特に、図を使って基準量を求める設問では、県の平均を17．1ポイント下回っている。 ●伴って変わる2つの数量の一方の値から、もう一方の値を求める設問では、県の平均を25．3ポイント下回っている。	・授業内において文章問題をテープ図や数直線にあらわす活動を取り入れ、テープ図や数直線を用いることに慣れ親しみ、問題の条件を正しく理解できるようにする。 ・文章に出てくる数字は何を表しているのか考えたり、立式された数字を言葉の式に直したりする中で、解決の手順を考えていくことができるようにする。
データの活用	平均正答率は、県の平均を下回っている。 ○二次元表の読み取りに関する設問では、県の平均とほぼ同じであった。 ●折れ線グラフに関する設問では、県の平均を下回った。グラフから変わり方や必要な情報を読み取ることに苦手意識をもっている児童が多いことが推察される。	・グラフに関する問題に取り組む前には、どこに着目して考えるとよいのか事前に考えさせ共有することで、グラフを見る視点を明確にさせる。 ・算数だけでなく、社会や理科などの授業においても、グラフや表からどのようなことが分かるか考える場面を設定し、グラフや表が出てくる問題に慣れることができるようにする。

宇都宮市立富屋小学校 第５学年【理科】分類・区分別正答率

★本年度の県，市と本校の状況

分類	区分	本年度		
		本校	市	県
領域等	物質・エネルギー	53.6	58.1	57.2
	生命・地球	62.2	71.1	70.0
観点	知識・技能	66.5	75.5	74.4
	思考・判断・表現	48.3	52.7	51.9
	主体的に学習に取組む態度	33.0	42.4	41.7



★指導の工夫と改善

○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

分類・区分	本年度の状況	今後の指導の改善
物質・エネルギー	○「電気のはたらき」の設問についての正答率は、県の正答率と同等であった。 ●「物の体積と温度」の温度による体積変化を利用したものを選択する設問については、県の正答率を上回っているが、金属の温度による体積変化を記述する設問については、県の正答率を下回っている。 ●「物の体積と力」「物のあたたまり方」の設問については、県の正答率を下回っていいる。 ●「水のすがた」のグラフを見て実験の予想が正しいとした場合に得られる結果を推測する設問では、県の正答率を上回ったが、実験の結果を、決められた言葉を使って記述する設問については県の正答率を大きく下回っている。	・実験結果をきちんと読み取り、違いが生じた理由などを見つけられるように、今後も継続して指導する。 ・実験の中で条件を変えて予想し、結果を比較するような学習活動を数多く経験させる。また、どうしてそのような結果が生じたのか児童同士交流できるような時間を授業の中で設定する。 ・各単元末に、自分なりの表現の仕方で学習のまとめをさせることで、説明する力を付けていく。 ・実験・観察による変化や様子にしっかり着目させ、口頭や記述による説明等の対話的な言語活動を重視し、児童相互に意見や考えを交流し合って理解を深められるようにする。
生命・地球	○「月と星」についての設問についての正答率は、県の正答率とほぼ同等であった。 ●「１年間の植物の成長」「１年間の植物のようす」の設問では、いずれの設問も県の正答率を、下回った。特に「ツバメの１年間のようす」については、県の正答率を大きく下回っていた。 ●「自然の中の水」では、「水を入れて覆いをしたビーカーの数日後のようす」を選択する設問で、県の正答率を上回った。一方、「日なたに置いた水の量が減る理由」の設問については、県の正答率を下回っていた。	・各内容で、できている問題と、できていない問題が混在していることから、基礎的事項の定着を図っていく。 ・動植物を継続して観察しその結果をグラフや図、言葉を使ってまとめ、成長の様子について理解できるようにする。 ・生活の中で体験していることについて、理由も併せて理解できるよう、身近な現象と実験結果を結び付けて理解できるよう指導していく。

宇都宮市立富屋小学校 第５学年 児童質問紙調査

★傾向と今後の指導上の工夫　　○良好な状況が見られるもの　●課題が見られるもの

○「授業では、自分の考えを発表する機会があたえられている」に「はい」と答えた児童の割合が、県や市の平均と比べ10ポイント以上上回っている。同学年の学級と比べ、授業内において積極的に発表する児童が多いことがこの結果から分かる。これからも自信をもって自分の意見を発表することができるような雰囲気づくりに努めたい。また、発表する前にじっくりと考えることができるような時間をとり、自分の意見や考えを導き出すことができるようにしていきたい。
○「先生は学習のことについてほめてくれる」に「はい」と答えた児童の割合が、県や市の平均と比べ10ポイント以上上回っている。今後も児童が意欲的に学習することができるように、一人一人に目を配り、肯定的な言葉がけを意識的に行っていきたい。
○「毎日、朝食を食べている」の肯定割合が100%であった。学級での指導だけでなく、養護教諭や栄養士の保健指導や食育指導が定着しており、正しい生活習慣が身に付いていることが分かる。
●「勉強していて、おもしろい、楽しいと思うことがある」の肯定割合が県や市の平均と比べ10ポイント以上下回っている。おもしろい、楽しいと感じるには、「できる」と感じることが大切になってくるので、児童に達成感を味わわせ、自信をもって学習に取り組むことができるような授業を展開していきたい。
●国語・算数については，「好き」と回答した児童が60%程度で，県や市の割合を下回った。児童の多くは「将来のために大切だと思っている」と回答しているものの，教科に対する「好き」という肯定感をもてずにいる。児童の興味や関心を高めたり，スモールステップの計画を立てたりする工夫をしながら、基礎・基本の定着を図り，少しずつできたと思えるような達成感を味わわせ，国語・算数に対する抵抗感をなくしていきたい。
●「本やインターネットなどを活用して、勉強に関するじょうほうを得ている」に対して「いいえ」と答えた児童の割合が、県や市の平均を比べて約25ポイント高い。一人一台の端末が整備され、情報に触れることができる環境は整っているので、授業の目的に応じて効果的にタブレットを活用していきたい。
●「自分には、よいところがあると思う」の否定割合が、県や市の平均を6ポイント上回っている。学校内において児童の自己肯定感を高めていくためには、授業のみならず、係・委員会活動や各行事、休み時間など様々な場面において称賛の言葉がけを行い、児童が自信を高めていくことができるようにしたい。
●インターネットの使用時間について尋ねた設問では、普段の使用時間について2時間以上と回答をした児童は、県や市の平均と比べ、10ポイント以上上回っている。授業内で積極的に活用しようとしながらも、児童の健康面に配慮する必要がある。養護教諭と連携しながら、長時間の使用が体に及ぼす影響についても指導していきたい。

宇都宮市立富屋小学校（第４・５学年共通）
学力向上に向けた学校全体での取組

★学校全体で，重点を置いて取り組んでいること

重点的な取組	取組の具体的な内容	取組に関わる調査結果
多様な視点から課題について考えることができる協働的な学習の指導の工夫	目的に応じたグループ学習や視点を明確にした話合い活動を、教師が意図的にコーディネートする。	「グループなどでの話し合いに自分から進んで参加している」の質問への肯定回答率は、4・5年ともに県や市の割合とほぼ同等か上回っている。
分かりやすく伝える力や、正確に受け止め学び合う力を育てる工夫	一人一人の思いや願いをもとに、共通の視点をもって話し合うことができるよう、事前に自分の考えを書かせることで、伝える力の向上を図る。	「クラスの友達との間で、話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」の質問への肯定回答率は県や市の割合と比べて4年生は上回っているが5年生は下回っている。また「自分の考えを文章にまとめて書くことはむずかしい」の回答率も同様の傾向が見られ、書くことや話すことへの抵抗を感じている児童が見られることが伺える。